渡天物語

へ遠13
1295
11

特
へ13
1295
7

源天明記巻七

目録

一　亀山御事の事
附　源郎と伊賀家御の事
一　門屋金蔵の事
附　源郎妻の事

但州
湯嶋
宝玉文庫

宮内省圖書寮

源天四流年七

建仁寺人名年

法眼源慶の事

同山亀山建仁寺といふ百年執事の連
校ふ一寺住持京市文百人ばかり勅門
住持に住持京市尤ハ勅列の賞源慶房と
建仁寺ばかりなり元亨大系一万寺門
寺 勅号に仁義の文字ばかり

たづし沖広吉ふ[illegible]数しゆ家い新つ
のうを氏紙をうを清をよをを義法
家一編を流年し物法と侍後の門戸
文十日わひい二七ちと言ふを門れ水
氏一弟をを義部の芸能し新ふ見
乃をををらに遺部編のをを外をり
とお寄り対を流家清ち横切黒屋
し高中編言と氏義し皮蔵大
紙言ふ対し刻に門屋の侍後い二位

貴ふしを関会書帯形の侍に仰く
沙物い伝をりわをい邪いをしい
邪侍へ文をおを冊をを冠雲の
しを死出の山絵をひ二墨をひふ
たづふし言ふを氏初の芸業をなをけ
絵集のをいをらわをを退をを姫し
う志実ふの紙家とりを言をと業
ひわをを関会しをを言をに氏絵をま
ふを身一生の中を芸絵をを文を長

しこ經をよみ念仏せられしに決定し
こはいかんとぞうちおどろきけるにかくしなば
寺に服縁せしむる事一生舞りよし奥禄
列せられたまひしかど浄京舞りふしこ
是非ニ一人もなし其比相應寺の
材木屋道よ古跡れん然入道よう阿
が住寺縁結ひくじの守社なり杖ぶ
宗は人あつ錢ひゝはとゞ由豊蓮
まづ何とそ法願ふうり人是言人

當湖深しけれは浮子らもたてまつりしと
いはく杖ぶつ宗殊芸ふて殿にはねしたれ
ともいつ浄土宗よりて門徒ハ深の印にいまさん
なりにしか流は男一生門徒の緒保をもちいてすえ
浄土宗浮浪上人のなりにまきとりて文
浄土宗誠をしかね萬歩の文學きも
浄土宗なりけるもいと言宗のむきとなり
にはり深く文浄宗なりんの事ともり神ふ
なし深くて深をとりかもは宗紙の

明宗にあひきこゑおりしと申されける間土で
以上は長田の庄司が萬鏡の首をきって
清盛に渡す人ほどびに説人となりけるか
よしとも舅にして庄司が悪行におそろしく
ところ京東には尼にたのみつよりたり出家
の門徒は絵像をそなたさ田わたにかへるは
木本りのは殿加わりかまるかれおうみとして
右かし一人の不孝そそぞろ手ひとし
京ようき御所地東と綾しあはれて

御さはうくしとゆゑは絵像も伝言
の跡ふうこゝわかもとそまびかくふまの代
彩をうけ給ひ尼は半の首をせんりとて
京の旅しるし御り秋九年京東に御座の御部
ふわうず御年絵像おもむきしぬると
かくまま御東参へて京まで絵像参
らはてまへうつわへこさ祈へしむ年
門徒の絵像ともせ門わかりしかわかりて
ふり語そせうりて度化宗とそふむ

じん婦と姉系部うとあるを清たる系
言葉十婦なる長系うり清と系ん清也
家ちあはんぞ門屋はらんまに長部
しのと部ひうと以は九系系中部
抱んも一意に門屋の家系うとうと
ほうと浪けうとも一ひの長部ふも及
ぞ及うとうり作のはるむとこ〇部作と
はひと二ちとと作と系ん系い部
部ひの民ちんと部ふ後ち部ふ

ひのすとうとちの西ちわうと海部
御系ちの婦ひ婦ひとと部ふた
と系ら生作信ハいとぞこ陸系中部ふ
耶系と清系ちうといるさうと部に
ちと陸系ちと作るもひ生信
部ひんまするハ作ひの乃ちうり川ちう
部民ちあるみまと信へ家系ふと武
部ちる一と長信せちうと系ん屋代せた
部ひうとりあは先ん門屋の

肉食書帯八月の世より新書洗濯
ものとて必ず一味の濃き行きに沿ひ
らきとて元治の初めわい悪とありて
芸能修せるものの法則とこひしりけ迎
芸いたにと張りまは修信恵慶義人
ていて鉄字ものに法紀より人は法義論
悪ものと嗜ても高紀まは修まる法生後
とけこうれり問く歩帯心字ものとて
りものこりの今必ず一味のありとは

ものあれば又用ひごるものをけるという
法家のきこうあまりごとと二段式
きといこうあるひ弟子ものこ
清新と新とは別新ものなる
らは肉食書帯世ものこ新四
塔とこひこうへ人席の表論法用ものこ
論きりんでものこるとれこうはいの
こりけ悪いいるとこ問こうは恵慶こて
字紙の塔法用八津ものこ

たゞり顕ます涅悪人又隠れ女人一類の
苦ゆゑふかくて極楽をねがはすると
いかの一念をも浄土人のすゝめてまい
らす釈尊の大きにわれとも附属
京からしと誠ひ給はしと誠しておもひを
呈給ひかより浄ゆるの人な云とりとめ
勿れ浄土上人ねすくに浄土の念仏にお
て又阿弥陀仏を生前にかくへきよし
唯念仏ひとへにいせん善人の跡をたへた

いそぐ其身をたすけ候えは自らせいの
ちそとと念仏上人浄土の法縁並に一大事
かんやまれまむこの世の有門流にもまて
思ひざるいひたえ給ひにはうしゆの悲惨
菩提ゆゑを及ば浪人とす継をいふ人
示さしう南無阿弥陀の骨身を念仏の近言を
其たらんとを念仏子方まいるつゝせん
とのくちまほまい年しれん念仏を年
まいゞらぬし念仏はいまだかんくそちう

たとへ紙ひの一行にても法文開下
さきよとも写すちふかくのぼりせんもんも
中願せしとて菩提よら申けし時さ
銘ひなほしとて丙くいま今文の
半なりしとおもふは修行もせん
なりしこのとすずかうすずしうあしへ入り
御縁よ助と中をれは申けれも行く
うた大方貴縁とおほめて不法被
劉よ及てて以人そてちしとお至く

宗論せんとて天下の法度とぞして候説
事りうししてせんけ縁い中ともうむたに願説
浄土宗にはけましたに法要はいて
行人とさうめつ伊藤たん浄土宗よあつて主は
たひよりめんし入百年よ生しうら古き安
明おのまさあしまいさらも及ぶ使何れ
行よとうしに法の証人中まうし
五しと数年に百経七を今年の仏前は
なみふらんさもし今経のなすの西でも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

書せり

用金評議の事

附 海部郡[illegible]の支

明治六年八月ふ綱[illegible]家[illegible]の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かゝる災害なれバさりとハいへとさ
ま／＼事[illegible]ありけれバ女性[illegible]ともさ
よしなき事[illegible]ありしもし
[illegible]是[illegible]の[illegible]ましけり
すなはち[illegible]し[illegible]世の
八[illegible]より三度[illegible]し[illegible]
よりてハ[illegible]の[illegible]
あひしよりはじまりて元年九月二
日よ[illegible]の[illegible]よりて

元和の[illegible]大坂[illegible]
の[illegible]あり[illegible]の[illegible]入[illegible]
しかるに十日の[illegible]大[illegible]
二万両を[illegible]大金[illegible]の
の[illegible]として[illegible]用人
大[illegible]町[illegible]
あいつかり時よ[illegible]
[illegible]も[illegible]人[illegible]の[illegible]
の城ハ大坂[illegible]もやうよ[illegible]人さや

かのくいつとわれは中将公殊に御四十路
頭をそらへ給ふはハ中将わかやせよ又は願
ふくへ申給ふとて急用に来り方の西様に
わたしと申さるれは源親法然申
けれは海苔人給ひのとをりそれとも大臣の願ふ
の二月の要をつきにわざそれて後かのく
これ御役目なれはせきしつ申まいらし
そのへいたくてられし西様よりまこと承る
又もらわ御清ま及ぶへしといふ

いふれ御気色中ふへ願ふへ申付て御出
しといふた得旅中には苦しく存候より
候ましきよ所もやよて得用ひ候し
といふ御心益人もはや是からし悪気と
わうふ名高きに大なの仕返り決し
とて調へてし願ふ人一方ならす成り給ふへ
一方ありてあるまいかほしくも候こそと
頭はたま取せ源親の我は
しか入れ御心得候へしと人す存へし

る好貢へつけ会料を入と申されハ願ふも
間に源家にハ高綱勝分にあれし以後愛かし
大師の如くに寺銀作料を入と以て行同
仏花行毛夜なとハ子弟下の
願ふならハミうして申すて御用にたつへし
きれと断りていうらハかし会とせらる
ともに行き舞の御用にかりて座りて
ミえて延銀しかり海経伝家にハ何事
しる高綱先ならの風の（の）とよび

其て申もいつとも又月さらに高綱ふ此年こ
芸者にたすくるおのつから毎にしても到来もせり
又ハ匠方の新銀おほくに舞の方へとて拾こ
百人料銀よとして家部緋人来部より二石
大小を御人用に寺一万あまりしおさまりぬ
へしといふてさふなるう芸人のかハ御宗旨
是ハれ自作不知意の後にふかくもまき
の御書家よりこれとも入りして庵りすると
さらへし細なし御料經とも

めぐにほうとうし杏とれたる眼ひ一つとさへは
徳家も隠居し世はまだ半の
首尾するまとひにれぞんふよりくし源氏
天下の大名十二被と思し諸国より金銀
うら寮家にて女子あい并彼が藩に庸
甚だ博あつまとんさし居まてはすぐ
ある嵩てくめやしと部より昔あいもしりば
ちんとをかりにれん法のしとさられとこうりと
路あらへしとさ我銭さう川し地家へ

ん銭はしらせるもさし手のあ人満然よ
對談し去向の門用金かしこ出りはと
正ろうし勝会さり御家にはなひ姓ふ
一万両の大金調達し望ちかゝり
けふおやえん去らあ彼へ金子三千あ
書音料として おそりえる彼の由男
もとし左なきと字まで付けはあ彼は去ひ
不娘ひの川へ事のはからず巷て屋
なりて左なきとおひさう川すれども御用

[illegible]
日月ナツる[illegible]二百文の金を
代価[illegible]る酒[illegible]百文銭代に[illegible]
ひらで代[illegible]
の義中[illegible]
[illegible]や町屋[illegible]
[illegible]
安[illegible]
金[illegible]

二百文[illegible]
下[illegible]
[illegible]
さ[illegible]
と[illegible]
[illegible]ナ[illegible]
屋[illegible]
[illegible]
業の[illegible]

始日よりてあし夜に金く壱歩を出し
行者行内あへおとおまぬ頭をあへ
ともよ沈醉しつりそもでうるよ
ぬとその数れ九つ門はよろこり望でへに
新門れふうまん新縄門の往来よおかうく
その心ろ安ふわふつちや額の小さんといふ
左史二人れ手代み々い稲妻や十帝左史書
師左史をふたいこ十人大さうれの金
惣人門人乃及ぜさるゐさうしりの

さらでもけなげなりしに珠數をねりして
わけてたにうすい望めいさ川としま
夢中に珠数を繰り行者行内にむかい瑞ふ
念おもひとい一心ろとやうじんしてれ御靴
夜まいも中半望してつけ念仏て一万あいの門
男女とへし行きそけ念まての先達てり二万
あそうへしたさへしとて一万あおほし
それはあへをおそしてゆそまれとゆう
二万あるは三年の田網まで百遍まいしと

寛永四年丁卯七